

松本清張記念館

◆館報◆
2003. 12
第14号

飛鳥の人像石の面貌は、
日本人でも朝鮮人でも中国人でもない
「異種族」の顔を思わせる。

昭和四十八年六月十六日から翌四十九年十月十三日まで、朝日新聞(朝刊)に連載された長編小説(原題「火の回路」)である。現代小説に、古代史の謎解きをからめ、独自の新境地を拓いた意欲作である。



昭和50年11月・12月
文藝春秋刊

現在入手できる本
松本清張全集 第50巻(文藝春秋
『火の路』 文春文庫(文藝春秋)

目次

- 開館五周年 記念講演会
夏樹静子「ミステリーのころ」……………2
- 特別寄稿 おじいちゃんの声
菊池寛の思い出と新資料 松成貴美……………4
- 企画展紹介『松本清張「火の路」誕生秘話』……………6
- 清張原風景「点描」……………6
- 展示品紹介……………7
- 友の会活動報告……………7
- トピックス……………8

作品紹介

大学の史学科助手、高須通子は調査に来ていた奈良の町で、シンナー中毒の凶漢に襲われた海津信六を助けた。彼は日本古代史の優秀な学徒であった過去をもつが、なぜかそれを隠した。大阪で表向き保険の勧誘員をしていた。東京にもどった通子は飛鳥にこの、酒船石や猿石、益田岩船などの古代石造遺物の謎の解明をテーマにした論文を発表した。それが縁で海津と文通が始まり、会って教示をうけ、遙々イランへと調査の旅に発つ。レイ、イエストと廻り、沈黙の塔、拜火壇、拜火神殿などのゾロアスター教遺物や拜火儀式を實現して帰国、第二の論文を発表した。古代ペルシアの遺跡・遺物と飛鳥の謎の石造物とを比較考証し、古代の飛鳥にペルシア人(ゾロアスター教徒)が居住していたという仮説を論証したものであったが、学界からは無視され学内でも排撃される。

期待していた海津からも何の連絡もなかった。そのあだに、通子も会ったことのある海津の姪が自殺し、知り合いの男が古墳の盗掘中に事故死した。突然の自殺の原因と男の死の真相を明らかにする鍵は、海津の封印された過去と現在の裏の顔にあった。

ようやく海津からの手紙がきた。通子にむかって、唯一正面から答えてくれる声であった。しかし、すでにそのとき声の主は、自ら命を絶ち帰らぬ人となっていた。

(学芸担当 中川 里志)

夏樹静子「ミステリーのこころ」



2003年8月7日（木）
北九州国際会議場

勿論面白さということも非常に大事に考えてらしたんですね。ミステリーはトリックによつて惑わされるところに面白さがある、しかしトリックの創案ばかりにこだわると面白さを備えたうえで、人間を描かなければいけないと。そしてそこから有名な動機論が出てきます。「動機を重視することがそのまま人間描写に通じるように私は思う。犯罪動機は人間

がぎりぎりの状態に置かれた時の心理から発するからだ。」私はトリックとか謎解きとかを、「意外性」と置き換えてみたらどうだろうかと思つたのです。トリックもまた意外性を作り出すための仕掛けであり、謎解きもなぜ意外だったのかを説明する論法です。あつという意外感の驚きを読者にもたらすことこそが、絶対に欠かれないミステリーの要素です。清張さんの作品の意外性というのは、謎解きのもたらした意外性が多いと思つた。あれだけの筆力があるからそんなに仕掛けをしなくてもぐいぐい読ませしてしまうのに、新人のころから大家になられた後も、いかに面白い仕掛けをするかということに熱心に考えてらっしゃつた。「推理界の芭蕉」というのは、文学史上の清張さんの位置づけでもあると思つています。

私がものを書き始めた頃、ゲーム性・面白さと、社会性とか問題性とかを全部備えたのが清張さんである、清張さんに学べと編集者から教育を受けて育ちました。どなたでも「自分にとっての清張」のイメージをお持ちかと思つたが、作家としての私には清張さんは「推理界の芭蕉」でした。

ミステリーは欧米で生まれ、日本には明治の中頃入つてまいりました。その後探偵小説は文学であるかという論争がおきました。この論争をうけて、昭和二十二年に江戸川乱歩さんが「一人の芭蕉の問題」という文章を発表されます。和歌から派生した市井俗人の遊びにすぎなかつた俳諧を、芭蕉が芸術・哲学にまで高めた例をひき、「探偵小説を至上の芸術たらしめる道は恰もこの芭蕉の道のほかのものではない。百年に一人の天才児が生涯の血と涙を以て切り開

く人跡未踏の国。ああ、探偵小説の芭蕉たるものは誰ぞ」と。探偵的要素と小説的要素は相容れないものようだが、芭蕉のような人物が出てくればその偉業を成し遂げるであろう、ということを書いておられるわけです。清張さんは推理界の芭蕉であつた、というのはここからのごとく思います。清張さんもミステリーに筆を染めるようになられたのは、人物に血が通っていないような先行の作品に不満を持ったためと書かれています。俺が書いてみようかという気持ちに本来の文学的資質、生い立ち、社会へ訴えたいこと、そういうものが全部合わされて、実に乱歩さんが期待したような、本当に文学と推理的要素を混然一体と調和させた作品が仕上がつたのではないかと思つています。

探偵小説は、戦後は推理小説という言葉になります。清張さんの推理小説は社会性もありシビアな印象ですが、

私をはじめ清張先生にお会いしたのは昭和四十六年で、全くの新人の時でした。よく短篇を載せていただきました「小説現代」の編集長大村彦次郎さんが紹介してくださいました。清張さんの所に伺い、子供を抱えながら書いています、とそんな話をしたところ、それは大変だねと、大村編集長に、「こういう人にはあまりカレンチウキユに原稿を要求してはいけないよ、思いやつてあげなくては」とおっしゃるのです。難しい言葉でございまして、分脈からだいたい察したんですけど、うちに帰つて辞書を引き、昨日も喋るに付てもう一回引いてみましたが、唐の古い書に出てきて、『租税などをお上がむ』とくしく取り立てることを『苛斂誅求』と(会場笑い)。むくきびしく原稿を取り立てちやいけないうと、ご存じの通り清張さんは難しい言葉がお好きで、小説の中によく出てきます。私が最初に清張先生の警咳に接したのは

苛斂誅求という言葉でございました。

それから今は何を書いているのかい、と聞かれました。私が書いているものなんか長々と話しても退屈なさるか、なるべく手短かに話そうと思っただけで、若い者はどういふものを書くだろうかと注意深く聞いてくださるので、非常に感動しました。ちよつと席をお外しになったときに、私はそつと移動して先生の椅子にかけてみたのをよく覚えています。椅子にかけたら大作家になれるかなと(会場笑い)。ところがほかの編集者に聞きますと、清張さんに褒められるのは一回きり、いつまでも褒められているようじゃ全然望みがないよと。清張先生はどれほどの大作家になられても、ちよつと頭角を現した作家は皆競争相手と思つて、絶対軽々しく褒めたりしないと、先生をからかい半分に言われました。それだけ真摯真剣に仕事と取り組んでいらしたんじゃないかと思ひます。

話を変えるようでございますが、人は誰も自分の生い立ちとか人生経験で人生観や物の見方を作つていく訳で、小説家であれば、それが作品に投影します。清張先生も何回となく言われておりますように、先生も生い立ちや経歴が作品に投影したわけでございます。私の話になります、私も今から約十年程前に、非常に苦しい思いをした経験から本当に人間観というものが変わりました。平成五年のある朝、突然鎮痛剤も効かない激しい腰痛と全身倦怠感に襲われ、横になつてじつと耐えるしかない状況になりました。検査を受けても原因が分からない。仕方なく仕事も横になつていたんですが、小説というのは紙に書いた文字から、登場人物が立ち上がつて動き出さないといけないのに、寝て書いていると、全然人物が立ち上がらな



いんですね(会場笑い)。元来は明るい人間なのに、一生治らないんじゃないかと鬱になり、惨憺たる状況が二年も続いた時、心療内科の先生に巡り会いました。私が病院で検査をきちんと受けていることを確認したうえで、典型的な心身症と診断されました。仕事をしたい意識と、疲れ果てて休みたい潜在意識とがどんどん乖離し、とうとう潜在意識が「病気になるたら休める」と病気をつくりだしたんだ、治すためには断筆するしかないと言われました。そうしたら突に不思議なことに、断筆しますと約束した時からじわつと治癒してきました。

この経験から、一つは人間は自分の中には知らない自分があるんだということ、もう一つは意識と潜在意識の両方で心というならば、その心と肉体とは密接に関わっているんだということを学びました。そういう観点から清張作品を読んでみると、心を扱った作品でも、人間の性格というものを書くことに非常に優れた方であつたという気がいたします。

一番それを感じましたのが「父系の指」です。実に「読ませるなあ」と思つたんですね。両親と叔父との対比とか、それを囲む周囲の人々の性

格が、誠に見事に描写されている。人間の性格を描くということがどれほど面白いかとしみじみ感じさせる。そういう作品の例をあげると、それこそ時間がないんですが、清張さんは徹底的な冷血漢や極悪非道な人間というのはあまりお書きにならなかつたし、出てきても主人公にしたのは少ないんですね。清張さんが好きだつた主人公は、気が弱くて不運な人間、あるいは社会の中の強大な権力や、より強い人間の欲望なんかに犠牲にされて翻弄される、どこにでもいるそういうふうな弱い人間。そういうものを書いた清張さんという方は結局非凡な才能に恵まれて、非凡な手法によつて実は平凡な人々を書いた。それが万人の心を揺さぶつて普遍的な作品を生みだす結果になつた。清張さんとは、そういう偉大な作家であつたと思う次第であります。

夏樹静子

1960年慶応大学文学部在学中に「すれ違った死」で江戸川乱歩賞候補となる。1973年「蒸発」で日本推理作家協会賞を受賞。代表作に「風の扉」「量刑」などがある。「母と子」をテーマに女性らしい細やかな心理描写の作品や、社会性に富む題材を積極的に取り上げた幅広い作品で、国内だけでなく、海外でも高い評価を得ている。



企画展
「松本清張と菊池寛」によせて



ちばてつや氏とは、私がテニスクラブで知り合い、同じ歳という事もあって友人として一緒に遊んでいます。
ある機会に、写真とイメージでこの色紙を描いて下さいました。それを使わせていただきました。（松成）

特別
寄稿

おじいちゃん

菊池寛の思い出と新資料

松成 貴美
まっなり たかみ

声

三年ぐらい前になりますか、冬に大学時代の友人と博多へふぐを食べる旅行をしました。その折、かねてから藤井館長のおさそいを受けていた当館へ足をのびしました。その時「こんど、清張と菊池寛という企画展をするのでよろしく」といわれ、「こちらこそ、もう忘れられかけている寛をとり上げていただけるなんて、うれしいことだ、という思いで帰って来ました。

そして、いよいよ今年になって準備が始まりました。しっかりした企画展ですので資料探しも具体的でこちらもやり易かったのですが、反面難しいこともありました。

その一つが「声」がないかというものでした。最初は「声は聞いたことがない」と思ったのですが、そういえば以前叔父（寛の長男英樹）が「これに、おじいちゃんの声が入っているかもしれない」と言っていた小さな金色の盤を思い出しました。

そこで、未整理の資料のホコリの中から探し出し、専門の方に再生を依頼しました。叔父に聞かせたところ「間違いない。オレが録音したんだから」という事でした。昭和十二、三年頃、雑司ヶ谷の自宅の新築祝に、レコード会社から、大きな電気蓄音機と録音機が贈られたそうです。中学生だった叔父がいろいろ試しながら録音してい



企画展「松本清張と菊池寛」より

松本清張記念館開館5周年特別企画展
「松本清張と菊池寛」は、
平成15年8月4日～10月31日まで開催しました。

二つめが英文の自筆はないか、というものでした。清張さんも寛も英語を重視していたという事で英語関係の資料も多々集められその中の一つということでした。寛は、辞書を覚えたページから食べてしまったという伝説がある程、当時としては英語好きでした。

そこでまた、未整理の資料の中からこちらの学芸員の方に探していただきました。「これはどうでしょう」と手紙の下書きのような紙を持ってこられました。確かに内容を見て間違いないものでした。

それは、ミスター・トロッター宛てでした。私にとっても懐かしい名前です。きっかけは定かではないのですが、進駐軍の軍医さんで戦後すぐ菊池邸によく遊びに来ていました。

彼がくると広間でダンスが始まり寛が楽しそうに踊っていました。でも私としてはそんな事はどうでもよく彼が持つて来てくれる「おみやげ」がものすごく楽しみでした。なにしろ当時（昭和二十一年頃）としてはとび上がるくらい美味しいチョコレート、ジュース、またある時は、米兵のお弁当詰詰、これはレーションというもので、中にかんぱんのようなもの、風船ガム、ジャム、バター等と必ずタバコが三本入っていたそうです。また葉巻等も。ヘビース

モーカーだった寛はこの葉巻や三本のタバコをとてもよろこんでいたようです。なにしろタバコも配給で、紙と葉が別に来る時代で、私の物心付いての最初の仕事は、このタバコを巻くことと、印税のはんこを押すことでしたから……。

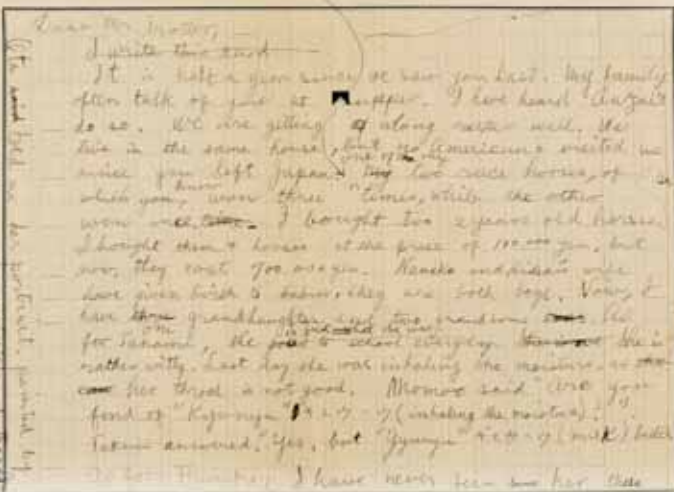
またこの手紙を読んで見るという思い出します。——たかみといえは”シイ・イズ・ウィッティ”頼知のある子だよ——という下りがあります。これも今思えばおじいちゃんの影響大なのではないかと思われれます。寛と私は九年間この世に一緒に居たことになりませんが、戦後、ハージに会い、比較的ひまで初孫の私をかなりかまっていたのでしよう。

贅沢な話ですが私は、菊池寛席のおはなしをしてもらっていました。これはすごく面白かったです。ある日「おはなし」をせがんでいる私に忙しかったのかめんどうだったのか、突然くるつとこちを向いてさつと手を出してきました。思わずその手を握ると、サツとはなして「はい、おはなし」と言われた覚えがありますし、英語を教えてくれる時でも、自分の好きな競馬の馬を指して「これはホースだよ」そして風呂場に行つて「これもホースっていうんだよ」という調子でした。きつと毎日そんな会話をしていた、私が「ウィッティ」なことを言

うとよろこんでくれていたのではないのでしょうか。「この歳になってもすぐしやれで物を考えてしまうのは」「三つ子の魂、百まで」の例かもしれません。

満五十九才で亡くなつてしまいましたが、もう少し長生きしてくれれば、私にとつてはもつと多くの良い影響があつたのではと思われれますが、不肖の孫はただ残念に思っているだけです。

（筆者の松成貴美さんは菊池寛の長女・瑠美子さんの一人娘。寛の初孫にあたる。）



知人の医師、トロッター氏宛て英文の手紙草稿

特別企画展

『松本清張「火の路」誕生秘話 —古代史家との往復書簡を中心に—』

今回は、奈良県飛鳥地方と、古代ペルシアの遺跡がのこるイランを主な舞台に、古代史の謎解きと現在の悲劇を縦横の糸にして骨太ながら哀しいロマンを織り上げ、独自の新境地を拓いた意欲作「火の路」を取りあげます。創作の過程で研究者との間に交わされた質疑応答形式の往復書簡中心の展示で、「火の路」の思索と創作の秘密を紹介します。

■開催期間

平成16年1月16日（金）～3月31日（水）

■会場

松本清張記念館 地下企画展示室

■入場料

常設展示観覧料に含む。

- 一般: 500円
- 中高生: 300円
- 小学生: 200円

■主な展示

1. 『火の路』へ

- ①『火の路へ』オリジナルビデオ上映
- ②飛鳥・古代石造遺物(写真パネル、酒船石模型、猿石(レプリカ)など)
- ③イラン取材(清張撮影写真・取材ノート)
- ④直筆原稿、掲載新聞綴じ込み、著書など

2. 通信講座『火の路』教室

- ①往復書簡(福山敏男氏、藪田嘉一郎氏を中心に)
- ②交流のあった研究者たち
書簡(門脇禎二氏、直木孝次郎氏、樋口隆康氏、直良信夫氏、他)

3. 資料室・書庫から

- ①コレクション(瑠璃碗、ガンダーラ石仏など)
- ②「書庫」内著書(「火の路」引用等)



清張書簡



ハッタの塑像



酒船石

赤間神宮の祭神は、二一八五年壇ノ浦で平家一門が滅亡した折に入水した安徳天皇である。もとは阿弥陀寺と称していたが、一八七五年(明治八)赤間宮と改め、さらに一九四〇年(昭和十五)官幣大社となり、今日の社名赤間神宮となった。先帝祭は、平家滅亡に辛うじて生き残った女官たちが、先帝の命日に参拝したことに始まり、

「赤間宮の先帝祭、亀山神社の夏祭りなどに母は私を背負って近所の女房連と行った。その戻りにこの灯台が見えてくると、ああ帰ってきたなと私は母の背中から子供心にも思った。汐の匂いが強くなる。白い灯台には棧橋があってその先に小さな円筒形ものが海面に立っている。(中略)今ではそれが潮流を験べる施設と分っているが、その独特な形も昔と変っていないかった。その灯台横の石ころばかりの渚には円錐形の赤茶けた岩が立っているが、その岩も母の背中から見えていた。もとは注連縄がまわされていた。すぐ前は門司側の和布刈の岬で、この狭い海峡を速い潮に乗って汽船や漁船が周防灘と玄界灘との間を上下した。」

(「骨壺の風景」)



清張原風景

点描

赤間神宮・亀山八幡宮

五月二日から三日間(以前は四月二十三日から三日間)にわたって行われる。幼年時代の思い出を振り返るとき、清張にとって赤間神宮は間違いなく、赤間宮であった。

亀山八幡宮も関門海峡に臨み古くは室町時代の遣明船も出発に際して太刀を奉納して航海の安全を祈願したといわれる。また、一八六三年長州藩士久坂玄瑞の指揮によりアメリカ商船攻撃合図の砲弾が境内の亀山砲台から発射され、馬関攘夷戦の火ぶたがきられたことは有名である。今日も夏祭りは夏越祭として、七月三十日に行われている。

祭りからの帰り、母に背負われた清張は「おかんあれは何かん」と訊く。母親は「さあ、なにするもんかいの」と言うだけで答えられなかったという。その潮流を験べる施設も、円錐形の赤茶けた岩も昔のまま海峡の波打ち際に立っている。



赤間神宮



亀山八幡宮

絶筆①「神々の乱心」



清張が最後に書いた原稿が、展示室2の二階、書斎へと導かれる通路横のケースに展示されている。このフロアには、書斎とともに清張の創作の息づかいが感じられる資料が並ぶ。執筆の際に使った眼鏡や万年筆、度重なる校正の跡、私物の古代史資料などとともに、絶筆は、かすかな余韻を残して横たわっている。

〈絶筆〉と呼ばれるものには二つある。「神々の乱心」と「江戸綺談 甲州霊嶽党」の二作品である。このうち「神々の乱心」は「週刊文春」に二年以上にわたって連載されていたもので、「江戸綺談」は「週刊新潮」に三ヶ月ほど連載されたところで中断した。

未完の作品として単行本化もされた「神々の乱心」については、担当編集者に「連載はあと十回くらいだよ」と告げていたという。ストーリーがようやくひとつに繋がってきて、いよいよクライマックスというところで、ぶつり途

切れている。これが、清張の死を意味していると思うと、読者は無念にも似た寂しさを感じるのだらう。下巻の末尾に〈編集部註〉が載っている。それによると〈本作品の核心部分は、『昭和史発掘』以来三十余年にわたって松本作品の取材・編集・出版を担当した藤井康栄が、折にふれて「あの話はいつか小説にしておきたい」と聞かされた題材のひとつであったという。『昭和史発掘』という大作の延長上にあり、二十年間温めてきたということだけでも、渾身の作品であったことは想像できる。創造力、構成力ともに年齢を感じさせない。一方、身体は確実に衰え、視力はすでに片方がわずかに見えるだけとなり、病魔が蝕んでいた。とはいえ、創作の途中で筆を折ることになるとは自身も思っていなかった。清張本人が、作品を書き終えるのを楽しみにしていた。きょく、読者の喜ぶ顔を想像しながら。

(学芸担当 柳原 暁子)

題字も清張の手によるもの



友の会 活動報告

●平成15年度年次総会 (8月7日(木):出席者80名)



北九州国際会議場にて平成15年度年次総会を行いました。今回は幹事改選にあたり、新幹事の紹介、また、幹事の任期を規定する条項を追加する等の会則改正が行われました。

した。

その後平成14年度事業及び決算報告、平成15年度事業計画及び予算案について審議を行い、いずれも承認を受けました。

●北海道地区文学館見学会・前進座公演観劇 (8月30日(土)～9月1日(月):参加者16名)

今回は小樽文学館(小樽市)と三浦綾子記念文学館(旭川市)を訪問しました。小樽文学館では開催中の企画展などを見学し、三浦綾子記念文学館では冒頭、斉藤傑副館長に館の紹介をしていただき、館内や「氷点」の舞台となった見本林などを見学しました。



その後、劇団前進座による三浦綾子原作「銃口」の公演を見学。公演終了後には、前進座の役者さんも交えて北海道地区会員との交流会も実施しました。

●前進座朗読劇「西郷札」(9月19日(金):参加者80名)

当初は記念館屋外スペースで小倉城の石垣をバックに行う予定でしたが、雨天のため館内地下ホールに場所を移しての開催になりました。朗読劇というスタイルは前進座にとっても初めての試みであり、音響や照明が効果的に用いられた斬新な公演でした。

●第4回清張サロン (10月30日(木):参加者17名)



文芸評論家・安間隆次先生を講師にお迎えして、「霧の旗」をテーマにサロンを実施しました。参加者がテーブルを囲んで、それぞれ感想や意見を述べ、先生

がそれに対して解説やコメントを加えていく形式で、和やかな雰囲気の中で、活発な意見交換が行われました。

●文学散歩 (11月13日(木):参加者36名)

大分県中津江村の鯛生金山を訪ねました。小説「西海道談綺」の舞台であり、清張自身も取材のため、訪れたことのある場所です。



廃坑となった坑内は見学することができ、西海道談綺のストーリーが再現されていたり、清張の肉声による解説も聞くことができました。その後日田市豆田町を訪問し、廣瀬資料館などを見学しました。

会員募集中!

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

北九州市立大学 秋期公開講座

「発見」文学博物館—— 読むだけじゃない、「清張」への旅

10月から11月にかけて北九州市立大学で秋期公開講座が開催されました。公開講座は一般市民向けの講座で、今回は「『発見』文学博物館——読むだけじゃない、『清張』への旅」と題して5回シリーズで開催されました。この5回のうち3回は記念館学芸員が担当し、文学館の見所や、企画展などについて説明、発表しました。

第1回●10月18日（土）
「読むこと、見ること、触れること：
拡大する読書空間」
北九州市立大学文学部助教授
重信幸彦

第2回●10月25日（土）
「立ち上がる活字の世界：
企画展ができるまで」
松本清張記念館 柳原暁子

第3回●11月1日（土）
「松本清張の『朝日新聞社』時代」
松本清張記念館 小野芳美

第4回●11月8日（土）
「文学館体験」
松本清張記念館 中川里志

第5回●11月15日（土）
「北九州文学：文学博物館の可能性」
北九州市立大学文学部教授 赤塚正幸



●編集後記●

開館5周年となる平成15年もあっという間に暮れてしまいました。人間の5歳といえば最も知恵のつく時期。まだまだ生まれたばかりの記念館もたくましく知恵をつけていきたいと考えています。今回は紙面の都合で「みんなの広場」「探検!清張記念館」はお休みさせていただきました。

(中野 吉明)



イラスト:山藤 章二

編集・発行 松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
- 休館日 年末（12月29日～12月31日）
- 観覧料 一般/500円（400円）中・高生/300円（240円）
小学生/200円（160円）（ ）は30人以上の団体
- アクセス J R：小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
バス：小倉北警察署前/NHK前下車
車：北九州市高速、大手町ランプより5分

松本清張研究会

第9回 研究発表会

12月6日、松本清張研究会の「第9回研究発表会」が紀尾井町の文藝春秋で開催されました。会員をはじめ、多数の友の会会員や一般の方など、約90名の参加があり、会場は満員となりました。

まず放送大学助教授の高橋和夫氏が「ゾロアスター教と現代」と題して講演されました。

次いで、立教大学大学院の大塩竜也氏が「法の限界への挑戦—転換点としての『霧の旗』」と題して研究発表を行いました。



高橋 和夫氏



大塩 竜也氏

第6回

松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対 象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。
- 内 容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成16年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

